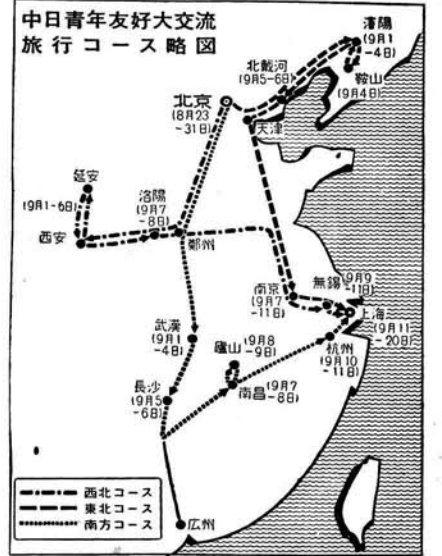


団結と友情のひと月

特集



北京の一週間

感激にはじまり感激に終わった中日青年友好大交流、青年たちは中国の各地に若さと興奮のうずをまきおこした。北京での一週間、上海での一週間……、どの思い出も青年たちには忘れられぬものばかりだ。ひと月におよぶ友好の大交流をふりかえって、ここにその全容を紹介しよう。

心あたたまる歓迎

胡同の奥まった家いえの庭から、うすうすと色づいた実をつけたなつめの木が、澄みきった空に伸びている。こずえをさわやかな風が渡っている。すばらしいか。中日青年友好史上に例を見ない

い北京の初秋の訪れである。通りでは、あちこちにはられた大きなポスターが人目をひいている。おなじ秋でも、ことしの北京には早くもうきうきした空気が流れている。国慶節にはよほど間があるというのに、いったいどうしたというのだろうか。中日青年友好史上に例を見ないほど多くの日本青年を一度に迎えるのであれば、北京が活気づいているのも無理はない。盛大な中日青年友好大交流がいよいよはじまろうとしているのだ。

どこからともなく、へ東京へ北京へのごえがひびいてくる。工場や学校、公共機関では、大交流にそなえての出し物の練習に余念がない。夏休みで帰省していた学生たちも、はやめに学校へ帰ってきた。

西長安街の大通りに面した民族飯店では、日本からのお客さんをつらつらに接待するための従業員大会がひらかれ、相談がおこなわれた。食堂の炊事員さんたちは、日本料理の専門店であるへ和風へ出かけて、料理のコツを習った。各階の従業員さんたちも、寸暇を惜しんで日本語の日用会話の勉強をつづけた。準備が一応終わったかみえたところ、急に七階に、ある外国の客人を迎えることになった。三日の滞在であったが、日本の



中日青年友好大交流

友人が到着するまでにあといくらの日数も残っていない。それまでにベッドのシート、椅子カバーなどを全部かえて、もう一度部屋をととのえてしまわなければならない。さて、どうしたものか？ 七階の従業員さんたちは、毛主席の「愚公山を移す」の学習をはじめ、困難にいかに対処するかを話し合った。準備が終わるまでは家に帰ってもおちつかないといつて、だれも休もうとはしなかった。こうして、もともとの予定よりいっそうりっぱに準備がととのえられた。

首都自動車会社では、日本の若い友人たちを乗せるバスやハイヤーの厳密な車体検査をはじめた。

北京の青年たちと筆談で気持ちを伝え合う新劇人代表団の人たち

安全運転に責任をもてばよい運転手さんたちも、それだけでは満足しないで、職装工に早変わりして、窓のカーテンを直したり、床に油をひいたりして、車内の改装にも力を入れた。記念切手の発行も準備され、花火工場では特製花火をつくり、記念パッチも用意され、へ中国と日本の青年は団結しようという歌まで創作された。

北京のまぢ全体が歓迎一色にぬりつぶされ、市民、とくに青年たちは、心をときめかしながら日本の友人たちの到着を待ちわびた。広州で日本の青年を迎えるために、一四〇名あまりの接待員が八月一二日に北京を出発していた。

八月二三日、待ちに待った日本の青年がやってきた。この日の北京駅は、色とりどりの旗やテープ、花束をもった二〇〇〇の若ものたちが埋められていた。地鳴りのような拍手と歓声がホームをゆさぶる中を、友誼を満載した列車が静かにすべりこんだ。歌ごえ、にぎやかなドラや太鼓にむかえられて、ホームに降りたった日本青年のどの顔もよろこびにはころびている。とうとう北京に着いたのだ！

用意されたバスに乗って、友人たちは、駅前から天安門前をとり西単の民族ホテルへとむかった。すれ違うバスの中や道を歩いている人びとまでが、手をふって歓迎する。文字どおり町をあげての歓迎ぶりだ。民族ホテルの玄関前では、たかさんの従業員が爆竹を鳴らし、ドラをたたいて出迎えた。